

福崎町文化

第24号 平成20年3月31日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行



銀の馬車道
『辻川界限・大庄屋三木家』

クロモジとズズダマ

―柳田学ロマンの源泉―

広島女学院大学 小山 清



一

兵庫県神崎郡福崎町の名誉町民柳田国男は、明治八年七月三十一日、兵庫県神東（じんとう）郡辻川村に生まれている。この辻川村は、柳田国男の生まれた翌年の明治九年に、西田原村と改称され、さらに明治二十二年の市制町村制施行によって、西田原村・東田原村・南田原村の三村が合併して田原（たわら）村となった。したがって、多くの「年譜」が、その生地を、田原村辻川としているのは、精確とはいえない。

柳田国男の生まれた松岡家は、辻川村（のち西田原村大字辻川）を、東西に貫く北条・山崎街道筋に沿った八十戸ほどの細長い集落の西のほうに位置していた。当時、まだ市

川に橋が架けられていなくて、渡し舟が対岸とを結んでいたが、東の丘から西の船着場へ下りてくる路の両側に並んだ集落のうち、柳田国男の生家のある北側の屋敷は、表の広庭が道路の拡張で削り取られていたため、窮屈な感じがしていた。

柳田国男の生家は、現在、鈴の森神社の境内に移転復元され、福崎町によって管理されているが、明治十七年に、一家が加西郡北条町に移転するに先立って売り払われ、北条へ行く道のカケアガリという所に長く移されていた。柳田国男が「北国紀行」に、「自分の生れし家は、カケアガリといふ坂の上に引移されて屋根みゆ。」と述べているように、買い主によって熊野神社の向こう側に移築されていたのである。

最晩年の口述筆記である、『故郷七十年』にあっても、柳田国男は、「私は帰郷しても山の上からはかにその屋根だけを眺めて、昔をしのぶに留めている。」と回想している。

生まれてから十歳までを暮らしたわが家を、山の上から遠く屋根だけ眺めて、昔を偲ぶに留めているのは、悔しさをやうしろめたさや気恥ずかしさが突き上げてきて、近寄って自分の幼時の体臭を嗅いでみたいという衝動を抑制したのであろう。

もともと柳田国男の生家は、柳田国男の生まれる前年の、祖母小鶴が亡くなった翌年の明治七年に、辻川村から北へ十二キロほど行った、生野街道のかたわらの栗賀村か福本村か辺りにあった、老人夫婦だけの家を買ってきて、三木家の借地に建てたものであった。百五十年ほどの間に三度も移築され、現在もなお往時の姿をそのままに残している民家は数少なく、数奇な運命に巡り会ってきたと言えるべきである。

二

柳田国男が「日本一小きな家」と呼んだ、生家の間取りは、『故郷七十年』の中に、「数字でいふと座敷が四畳半、間に唐紙があつて隣りが四畳半の納戸、横に三畳づつの二間

があり、片方の入り口の三畳を玄關といひ、他の三畳の台所を茶の間と呼んでいた。」と書かれている。この「田の字型」の間取りは、日本の

農村のどこでも見られたものであり、一組の夫婦と子供とが居住するには、必ずしも狭くはなかった。

四つの部屋のうち、国男少年がどの部屋を寝室にしていたかは、定かにされていないが、毎朝、厨の方から伝わってくるパチパチという木の燃える音と、それに伴って漂ってくる芳しい匂いによつて目を覚ますのを常にしてきた。その音と匂いと

の正体は、「母が朝飯のかまどの下に、炭俵の口にあたつてゐた小枝の束を少しづつ、折つては燃し付けにしてゐるのが、私の枕下に伝はつたのであつた。」と明かされている。炭俵の口には、細い光沢のある小枝を曲げて輪にして当ててある場合が多いが、そのころ国男少年の家では、わざわざ山に柴木を採ることをしないで、炭俵の口の小枝を残しておき毎朝用いていたのである。柳田国男は、その木がいったい何という名であるかを、長い間知らないでいたが、後年になって、たまたまふと嗅ぎとめた焚き火の匂いから、クロモジの木（鳥柴の木）であつたことに気づいたというのである。

それにしても、柳田国男の幼少年時の体験は、このクロモジが典型であるように、音と匂いとに密接にか



が、土地で鳥子柴と呼んでいるクロモジであったからである。

柳田国男は、『炭焼日記』の昭和二十年十月二十五日に、「鳥柴考」を書きなほす、小紙で三十二三枚。」とするしているが、昭和二十二年の「花とイナウ」を皮切りにして、クロモジに関する論文を数多く発表している。この時期、クロモジに執拗なまでの関心を寄せたわけを説明するのが、「鳥柴考要領」の「日本人が南来の種類であったことが、是からも段々と推測せられて来るのではないか」という一節である。

かわっている。例えば、匂いについて言えば、亥の子の日、うるち米の粉で作った餅を、互いの家で贈答すること、を、「私の家などでもよく此の亥の子餅を貰った。菊の花のや、うつろになつた小枝を、必ず重箱の中に入れてあり、蓋をとると、プーンとよい香りがしたものであつた。」と印象的に回想している。

ところで、クロモジの木は、高さ二メートルばかりの、クスノキ科の落葉灌木で、樹皮には黒斑があり、香気を含んだ材は、楊枝や箸に利用されるが、神に捧げる祭木としても知られている。柳田国男がこのクロモジの木を認識したのは、昭和十八年五月の東北旅行で、秋田県仙北郡角館町を訪れたときであり、旧武家屋敷が軒並みに結い渡している柴垣

の問題にまで導かれていったのである。」と語っている。鳥柴の木ともクロモジとも呼ばれる、神に捧げる祭木によって、はるか南の故郷から鳥伝いに日本本土に移り住んだという「海上の道」を想定し、日本人の祖先がどこから来たかという畢生の課題に取り組んだのであつた。

三

柳田国男の生家は、西田原村大字辻川を東西に貫く街道に沿って発達した集落の、西のはずれに位置していたが、その横手を、「上坂（うえざか）」と呼ぶ細道が、一本北へ向かって抜けていた。後年、三歳になる末弟輝夫が志願して、筋向かいの豆腐屋へ油揚げを買いに行ったところ、帰ってきたのを見ると、その端が少し嚙られており、「上坂」の方から走ってきたネズミの所為にしたエピソードが知られている。

この細道を一町ほど北へ登っていると、安産の神として知られた、鎮守の鈴の森神社へ通じており、それは、『播磨鑑』に、「播磨ノ神々集會之所也」としてされている、古くからの名所であつた。いかにもこぢまんまりしていたが、正面の十段ばかりの石段を上がると、わずかな境内

に「こまいぬ」が向き合い、「やまもも」の古木が茂り、「うぶすなの森の山も、こま狗はなつかしきかな物いはねども」と詠んでいる。

「上坂」を隔てたすぐ西隣の田んぼのほとりに、「ズズダマ」が三四株自生しており、毎年この実が熟すると、幼友だちの「ワキヤン」と採りに行き、草履を泥だらけにしては母に叱られたのであつた。子どもたちがジュズダマ（数珠玉）と呼んでいた草の実を、熱心に採りに行くのは、光沢のある実を糸に通して遊ぶためであつたが、長く二重にも三重にもわがねて、首から帯の辺りまで垂らして興じたのである。

少年のころのたわいもないズズダマの遊びを、柳田国男が生涯を通じて長く記憶することになった、もう一つの因縁は、九歳のころ顔から手足にかけて一面にいぼができて、どうにも放っておけないことがあつたからである。そのとき、漢方の心得のあつた父が生葉屋に宛てて「薏苡仁（よくいじん）」と書き、「これは、おまへたちが毎年採ってくるジュズ玉の皮を取つたものなのだ。」と教えてくれたのであつた。

ところで、子どものころ首から長く垂らして遊んだ、「ズズダマ」を

テーマにして、昭和二十八年、自然史学会の紀要に発表された「人とズズダマ」は、最晩年の大作『海上の道』に収録された。「ヨブの涙といふ珍しい名をもつたこの草の実は、日本では千年以上の存在が照明せられて居る。私は殊に因縁があつて幼少の頃から幾度と無く、是に興味を引かれ、又不審を抱いて来た記憶を持つ。」と書き出されている。

柳田国男は、「人とズズダマ」の趣意を、「微々たる或一つの植物の分布存続でも、縁あつてもし仔細に考察することが許されるならば、そこになほ人類発展の大きな理法を、見出すことが出来るかもしれない、といふことが私は説いて見たかったのである。」と述べている。「人類発展の大きな理法」は、ズズダマをしのぐ宝貝の魅力にまで発展して、

漂着の背後に計画的な渡航が控えていたことを見定めている。

「人とズズダマ」を含めて、八編の論考と一編の報告とを収録した『海上の道』は、日本人がどのような経路をたどつて、日本列島に来たのかということテーマに掲げ、壮大な仮説を提示したのであつた。その仮説は、必ずしも全学会の認めるところとはならなかつたが、日本人の先祖がはるか南の、中国大陸南部から沖縄の島々に渡り、島伝いに日本本土に移り住んだという『海上の道』を想定していたのであつた。

「海上の道」は、「や、奇矯に失した私の民族起源論が殆ど完膚なく撃破せられるやうな日が来るならば、それこそは我々の学問の新しい展開である。」と結ばれている。柳田国男が想定したような稲作の文化ではないにしても、南島を南から北へ移動した文化の存在を推定し得る限り、今後、日本人の起源をめぐる探求にあつて、『海上の道』は、常に新鮮な問題を提起する学説として、存在し続けるにちがいない。

四

人はだれしも、幼少年時代の体験をもつて、無意識的に人間形成を成

し遂げているのであるが、柳田国男の場合は、その体験の大半が意識化され、学問的な体系に位置づけられた点において特異である。しかも、それらは、きわめて豊富でかつ多彩であり、民俗学をはじめとして、国語学（方言論）・教育学（国語教育論）を考究していくに際して、いつでも取り出せる、感動を伴つた資料を提供し続けたのであつた。

膨大な文献を駆使し、全国にまたがる旅行の見聞を活用する中で、終始確固とした資料として重用したのが、幼少年時の体験であつた。先に引いた辻川時代のクロモジヤズズダマが、日本人の移住を説明する重大な手がかりになり得たように、感動を伴つたイメージ豊かな幼少年時の体験は、五十にも百にも達し、こればかりはほかのだれもが真似をすることができない、天性の資質から導き出された才能であつた。

柳田国男が終生、日本人の固有信仰に深い関心を寄せ、とりわけ晩年にあつて、氏神の研究に心血を注いだのは、ひとえに子どもころの日が一日遊んでいたうぶすなの森に、その原点を有していた。氏神様が鎮座する集落に生まれた国男少年は、暇さえあればお宮に来て遊んでいた

のである。柳田国男が幼心に発した疑問に執着する探求心は、クロモジにしてもズズダマにしても、驚くばかりの持続性を伴っていた。

もっと言えば、少年のころに生地辻川で試みた、いくつもの遊びを回想しているが、オオバコの葉をよく揉んで糸の先に結び、田の中を持ち歩いて蛙を釣り上げて遊んだのは、生家から鈴の森神社へ至る、「上坂」の辺りであつたらうか。親になつてからも、散歩の途中、子どもたちの前で演じており、「上手に竿をはねると、二丈三丈の青空まで、蛙が跳び上がつて、遠くの田へ落ちることがある。」と、披露している。

柳田国男の生地、兵庫県神東郡辻川村（現神崎郡福崎町辻川）は、播磨国の中心地姫路市から市川の流れを北に十五キロばかり遡つた所であるが、柳田国男ほど自分の幼少年時の体験を生き生きと語つた人はいないであろう。人はだれしも幼少年時の体験を、人生の奥底にしまつて生きていくが、故郷との結びつきの異常な深さと、それが学問というかたちをとつて表れている点とで、柳田国男の場合は異例なのである。

（平成20年1月10日稿）



「銀の馬車道」

—その背景と魅力—

環境デザイナー 足立裕美子

近年、「銀の馬車道」という言葉をよく耳にするようになりました。

正式には「生野銀山寮馬車道」、あるいは「生野銀山道」とも呼ばれ、明治6年に着工、明治9年に完成した生野銀山から飾磨港まで約49kmに及ぶ当時の高速道路といべき馬車専用道路のことをいいます。この道は、明治新政府による生野銀山近代化事業の一環として、鉱石の採掘や選鉱、精錬技術の改良、機械化とともに、物資輸送の効率化と経費節減のために整備されたもので、生野から神河町、市川町を経て、福崎町辻川界隈を東西に横切ったあと西光寺野方面へと南下し、飾磨港に至ります。馬車道が北条街道沿いの大庄屋「三木家」前に建設されるとき、「三木家」が敷地を15mほど引き入れ、土塀や表門を作り変えたという話は有名です。

いま兵庫県中播磨管内では、地域を代表する近代化遺産としてこの「銀の馬車道」を再評価し、沿道の名所

や食を繋ぎ広域的な振興を図る取組みがなされようとしています。また、神戸新聞社は兵庫県と共催し、創刊110周年記念事業として昨年からは今年にかけて各県民局単位にシンポジウムを企画、中播磨地域においても昨年十二月、「地才地創シンポジウムin中播磨」夢と元気を乗せてはしれ 銀の馬車道！ふるさとへ」を開催しました。

ここでは、このシンポジウムでパネリストとして参加させていただいた内容を元に、「銀の馬車道」の魅力について紹介したいと思います。

(1) 生野銀山の歴史と馬車道

生野銀山は、大同二年(807年)に銀鉱が発見され開坑されたと伝えられています。昨年は開坑1200年ということ、朝来市生野町では様々なイベントが施行されました。

しかし開坑に関する正式な文献は残ってはいません。一般的には室町年間(1542年)に、

生野城主、山名祐豊が本格的な銀の採掘を始めたと考えられています(古文書「銀山旧記」)。470年ほど前のことです。そして、天正六年(1578年)、織田信長が生野奉行を置き、以後、豊臣秀吉や、徳川家康も奉行や代官を置くなど、生野銀山は政権基盤を支える重要な資金源になっていました。三代将軍家光の頃には最盛期を向かえ、月産150貫(約562kg)の銀を産出したといわれます。

しかし、当時の鉱山は全て手堀で、通気や排水状態が困難になってくるとついに江戸時代の終わりには衰退して行きました。そこで明治政府になって近代化技術革新を図るために雇われたのがフランス人鉱山技師コワニエです。明治元年のことです。

コワニエはフランスでも有名な鉱山都市サン・テチエンヌの鉱山学校の出身者で、物資の輸送に必要な道路整備にも取り組みました。当時の日本では主な街道の道巾はほとんど一間(約1.8m)ほどしかなく、その上屈曲や凹凸が激しいなど、物品の輸送が不便で多額の費用を要し鉱業に不利なため、新たな道路整備が必要とされたのです。この馬車道建設の技術者としてあつたのが、コワニ

エ夫人の弟である技師シスレイです。明治五年のことです。

こうして「未だ、かつてあらざるなり」と鉱山長朝倉盛明氏が感嘆したと言われる素晴らしい道が完成しました。馬車道は、粗石、小石、玉砂利の順に敷き詰める当時のヨーロッパの最新技術工法(マカダム式)が用いられ、水田より約60cm高く、巾も平均三間(約5.4m)あります。

明治の高官、駅通局長の前島密氏も、播但地方を視察した際に(明治10年頃)、「生野南方 道路 修築 甚美(ハナハダウツクシ)」と、この馬車道に感動して、詩を詠んでいるほどです。

また生野には、コワニエやシスレイだけでなく、医師オーギュスタン



異人館 向かって左が一番館(コワニエ邸)、右が二番館(ムーセ邸)

や、土質家レスカースほか鉱夫、煉瓦積職人など、多くのフランス人が移住しました。そしてそのための洋館（異人館）が一番館から五番館まで建設されました。残念ながら現在はその全てが取り壊され、生野には残存するものが一つもないのですが、もし残っていたとしたら、このまちの景観はまた違った匂いを放っていたことでしょう。唯一、神子畑に移設されたムーセ邸（二番館）のみが当時の面影を今に残しています。

しかし、こうした多くのフランス人が夫人を伴って滞在し、ここで異文化の交流がなされていたと思うと、明治初期の生野はなんともハイカラな浪漫あふれるまちだったのだろうと思いを馳せてしまいます。

(2) 「銀の馬車道」ツアー

今から四年まえの平成二六年三月、姫路西ロータリークラブが創立35周年事業の一環として中播磨県民局の協力を得て、「銀の馬車道」を廻る自転車ツアーとバスツアーを企画されました。「銀の馬車道」ロゴをつけた特別列車も用意され、姫路駅から自転車積み込み生野駅まで直行、生野をしばし散策したあと、そこから自転車ツアーとバスツアーがス

タートするのです。図らずも中播磨県民局からの依頼でこのツアーの案内役を仰せつかることになり、神河町吉富あたりの現存する馬車道では実際にその足で確認していただき、福崎町では役場の協力を得て辻川界隈を散策していただき、そのほかバスの車窓からは沿線の歴史的ポイントを辿るなど、参加された方とともに飾磨目指して走りました。後日このイベントは新聞、テレビでも大きく取り上げられ、そのあと神戸新聞社は「銀の馬車道をゆく」というタイトルで、五月に9連載しました。

プロローグから始まり、生野町、当時の大河内町、神崎町、そして市川町、福崎町、当時の香寺町、姫路市と「銀の馬車道」沿い一市六町の紹介を各地の景観、特産とともに大きく取り上げました。「銀の馬車道」という言葉を頻繁に目にし始めたのはこの頃からです。

このツアーは、実際に参加された方のみならず、多くの人の心を捉えました。懐かしく、温かく、市川流域沿いの方たち全員の共有する財産として、「銀の馬車道」と言う言葉が地域に溶け込み、関連する商品開発が始まったのもこの頃からです。

(3) 兵庫県ヘリテージマネージャーの取組み

「銀の馬車道」沿線は文化財の宝庫でもあります。私たちヘリテージマネージャーはこの沿線で様々な活動をしてきました。

ヘリテージマネージャーとは、地域に眠る歴史文化遺産を発見し、保存し、活用してまちづくりに活かす人材を言います。兵庫県教育委員会と（社）兵庫県建築士会が連携して、建築士を対象に、阪神淡路大震災の課題となった歴史的建造物等、地域に多量に存する歴史文化遺産の保全に期待すべく全国に先駆けて誕生したもので、現在、ヘリテージマネージャーは県下7地区に分かれて活動しています。

特に中・西播磨地区では、県下でも唯一NPO法人化した組織「ひょうごヘリテージ機構ひめじ」を結成し、この馬車道沿線でも調査・発掘・提案など行なっています。

その一つに、中播磨県民局から委託を受け、戦前の古民家残存調査を管内約1500軒、平成一七年から一九年にかけて調査し、古民家の分布をまとめたものがあります。その中でも「銀の馬車道」沿線の古民家については、景観を形成する貴重な

要素となっており、①神河町栗賀・中村・福本地区、②市川町屋形地区、③福崎町辻川地区、④野里周辺地区、⑤飾磨街道地区の五地区を、特に今後の活用に向けた重点地区と設定しています。

また福崎町においても、「銀の馬車道」沿線にある文化財として貴重な、大庄屋「三木家」の町有化再活用計画にかかる予備調査業務や、「旧辻川郵便局」の国登録文化財申請のための調査等受託しています。これらは、生野から飾磨を繋ぐ「銀の馬車道」の中間点にあり、拠点としての存在を大きく問われるところなのです。

そのほか中播磨県民局の協力のもと、沿線にある古民家の再生・再活用のための相談窓口を、神河町馬車道沿いで行なわれた「まつせ祭り」の当日に開催しました。

兵庫県ヘリテージマネージャーは、馬車道沿線の歴史的景観を保全していくためにも、今後もこうした活動を続けていく予定です。

(4) 「銀の馬車道」沿線の魅力と地域の取組みについて

生野から飾磨へと走る「銀の馬車道」は、市川の流れに沿って山の景観から海の景観へ至る大景観です。通りには多くの店や町家が立ち並び、美しい町並みが形成されました。馬車道そのものも貴重な産業遺産ですが、沿線には景観上の魅力的なポイントが数多くあります。

生野から、市川を渡る盛明橋、神河町は越知谷川に架かる観音橋、その付近には「犬寺」と呼ばれる法楽寺、粟賀・中村の町並み、福本には徹心寺、福本藩陣屋跡、市川町には屋形の町並み、そして市川と合流する岡部川に架かる落合橋、福崎町に入ると辻川の町並み、旧辻川郵便局、大庄屋三木家、巖橋、西光寺野付近へ進み朝鮮人参役所跡岡庭酒造、大沢、太尾の集落、さらに南下して生野橋、馬車道修築の碑、そして野里城東小学校西側に馬車道修築の際半分埋め立てられた外壕、京口神屋町付近よりJR姫路駅を斜めに縦断して飾磨街道の町並み、亀山本徳寺を西に見ながら、飾磨津物揚場へ至るまで、実に49kmに及ぶ「銀の馬車道」は中播磨の景観や文化を繋ぐ道ともいえます。

兵庫県では、この「銀の馬車道」を播磨地域の南北の交流のシンボルとして掲げ、地域住民を交え、豊かな自然と歴史、文化を多くのの人に知ってもらおうという取り組みが始まっています。昨年八月から十一月に掛けては沿線の商工会が「銀の馬車道」リレーイベントを企画、各地で様々なイベントを開催しました。福崎町においても、十月二十七日に「銀の馬車道」ウォーク&もちむぎまつりが開催され、多くの方々が町内外から参加されました。

これら「銀の馬車道プロジェクト」を推進する母体として、商工会・商工会議所を始めとする各種団体、企業、行政などで構成された「銀の馬車道ネットワーク協議会」を結成し新たな商品開発も支援、すでに「銀の馬車道まんじゅう」、「銀の馬車道ずし」、「銀の馬車道マドレーヌ」、「銀の馬車道ラーメン」などがありました。平成十九年度には、梅酒（姫路市）、卵せんべい（姫路市）、ハンカチ（市川町）、ストラップ・土鈴（神河町）など8商品を開発支援対象商品として選定しました。この中に、福崎町の純米酒「鈴の露」も選定されています。

また、昨年、福崎町田原小学校百

周年事業として人情喜劇「銀の馬車道」が上演され、多くの人々に感動を与えたことは記憶に新しい出来事です。十月三十一日、田原小学校で二回上演されたあと、十二月六日「地才創シンポジウム in 中播磨」姫路キャスパホールにおいては、近隣市町から来られた多くの観客の前で、立派に舞台を成し遂げられ、好評のため追加公演までも挙行されました。

この公演は「銀の馬車道」における福崎町の位置づけを再確認させてくれただけでなく、演劇を通して地域を一つにする大切さを教えてくれました。

このように「銀の馬車道」は単に地域の歴史・文化の象徴だけでなく、ツーリズムの振興や多彩な交流の展開をめざし、地域の活性化の象徴として走り始めています。

「銀の馬車道」沿線に住まう私たち一人一人が、ふるさとへの誇りや愛着をもち様々な角度からまちづくりに参加することによって、地域の共有する財産「銀の馬車道」は今後も大きく育つていくことと思います。



小さな村の大きな篤志者たち —ぬまだ村 明治初期の群像—

前田 勝世

明治四年十月、ぬまだ村は播但一揆の端緒となる騒擾^①に對峙していた。九郎平は皆を寄せ対処方を諮る。糸三郎は竹槍の準備を指揮する。鎌十郎と呼ばれて、政治郎と徳次郎が赴き談判する。新三郎等は孫四郎のもとへ折衝に行く。

半月後、不穏な事態は回避され村びとは安堵した。竹槍は畑の野菜の支柱と化した。ところが予期せぬことがおこる。政治郎と徳次郎が捕らえられたのである。飾磨官憲の面目のためだった。九郎平と糸三郎は放免の嘆願に駆けまわる。四年の暮れから五年にわたる断獄方の冬は寒かった。政治郎と徳次郎の衰弱した身に凍えた物相飯^②は喉を通らない。あたたかい茶粥^③が欲しかったことだろう。釈放されたとき、二人は瀕死の態だった。

明治初年、ぬまだ村は刻苦にめげず陋壁^④を打ち砕く志士たちの愛郷の息吹が萌えていた。それから十年、村びとの苦難は続

く。明治十五年六月八日。入梅^⑤まだ、新村町ノ上から出た失火は乾ききった前淵の田の麦藁^⑥に燃え広がり、強い南風を呼んで、集落に延焼した。六十余戸のぬまだ村は全焼したのである。法性山^⑦は焼失し古文書は灰燼に消えた。

村民は困窮の淵に落ちた。戸長源四郎^⑧は村びとを励ます。源四郎は一町二反の所有田地を売り払い、皆に配った。住民の不休の働きと源四郎の献身によって復興は早かった。十年後には法性山も再建される。

逆境のなかでも徳松は練習小学校で村の児童に読み書きを教えた。大火を機に数軒が西山筋へ分家した。畑地であった西山はこの頃村落らしくなる。この西山の豊受宮の境内に「至誠潤郷」と刻する源四郎の顕彰碑が建っている。

災難は繰り返す。ぬまだ村は明治三十六年にも火災に見舞われ、十四戸が燃えた。源四郎は身を粉にして救援にあたる。

明治期、ぬまだ村は幾たびの受難に直面したが、村民の血の滲む^⑨労苦と強い共助によって苦境を克服してきた。そこには源四郎たちの「村びとの一人の毀れも見捨てまじ」とする心と自己犠牲を厭わぬ^⑩尽力の支えがあった。

格差を憚らない昨今の世相のなかで、深い感慨を覚える。

源四郎は弘化四年（一八四七年）に生まれ、幕末を二十年、明治大正を生き、昭和十三年（一九三八年）九十一歳でその篤実な生涯を終えた。

今年はいなむら源四郎翁の七十年忌にあたる。

源四郎翁の命日によせて

二〇〇七・九・二三

西山在住 前田勝世

- ① ぬまだ村 馬田村の古称
- ② 法性山 浄土真宗西正寺の山号 佛性山とも称する
- ③ 練習小学校 福崎小学校の前身校
- ④ 西山（筋） 俗称出屋敷

（参考資料）

- 播但一揆裁判記録
- 三木武八郎日誌
- 馬田村田畑名寄帳
- 善太郎文書
- 二郎文書
- いなむら家関係者談



西山神社の境内に建つ源四郎翁の顕彰碑

老人大学体験発表

老犬の存続・発展の為…

キー・ワード (Key・words) 「あなたが・主役」

体験発表・老犬顧問 森井豊



老犬の皆様・今日ワ・先ずワ「体験」は・過去形ですが、現在そして

未来も考える必要があると思いますので話が飛躍する部分があるうかと思えますが一緒に考えて戴きたい。第21回老犬・大学祭で私・「不死身ってホントー?」というタイトルで話をしました。あれは…本場の事で不思議でしょう、さて最初園芸部に入りその後、舞踊、IT部と老犬に入校約十年の歳月が流れ友人も沢山出来た事は嬉しく思っています。その間、発表会、ボランティア、旅行等人生を謳歌させて戴きました。私命ある限り、この老犬に來たいなアと思っっていますが、三百五十名の皆様も同感の方が多いと思います。恐縮ですが、最初は退職後「気楽」

に「土いじり」して野菜作り、花、果樹、「植木いじり」したいと園芸部に入り親切、丁寧な先生方の講義を聴き熱心にメモし勉強と実習で無農薬に近い野菜作りが出来る様になり非常に感謝しています。で…ある日突然本部役員になる様要請があり、解らない内「無我夢中」で他の役員の方々と相談しながら精励した次第です。学部は陶芸・史学・手芸・園芸・漢字・かな・IT・舞踊の八学部と巾広く学ぶことが出来「講師」も立派な方々で本当に幸せて「感謝」しなければいけません。各学部の役員は毎年交代し案外スムーズに選出されますが、本部役員の選出は難航します。何と云っても自治会三百五十名の「リーダー」で失敗が許されない「責任重大」である事は事実ですが、今迄の慣例・慣習で行けば良いと思えますので間もなく本部内では来年度の役員選考の結果「あなた」に要請がある時「勇氣」を出して受理して下さい。「誰か他の人がすれ

ば良い…」「目立ちたがり屋で…「オツチヨコチヨイ」とは思っています。確率で二割〜三割は役員そして人様の世話をする義務があります「役員」するなら「老犬辞める」と去った優秀な人が居ますが、これは卑怯で利己主義で「他人」の世話・面倒を見て初めてその苦勞が解り「文句」を云わない愛される人になるのです今迄逃げて常に脇役で甘んじてきた貴方貴殿が今度は「出番」で主役です、我々は希望を託し暖く見守って行きます。一度限りの人生・今日迄元気に生き過ぎさせたのも仲間との付き合い交流があったからこそで、「あなた」の子供そして孫が、おじいちゃん「役」して偉いナア・おばあちゃん老犬の會計して偉いネエ頑張ってネエ!と賛辞贈るとも、軽蔑しません。11月17日(土曜日)読売新聞第一面の「生きる宝」見て、ビックリしました「我が君、ご油断あるな。」これぞ東京の歌舞伎座で上演されている「土蜘蛛」の主役・人間国宝の中村富十郎さん「オン年」七十八才として「我が君は長男、鷹之資君は若十八才で…七十才に出来た子供さんですヨ…そのエネルギー「性力」にもビックリそして人間国宝の言葉に七十才で生れた子に対し責任がある未だまだ生き

て芸を磨かなければそして息子に名前譲る迄生涯現役で輝き増すと豪快に語り、笑う頭が下りますヨネエ…映画監督の新藤兼人さんも九十五才で現役です。上には上があって「あなた」はまだ〜出来るし、やらなければいけないと思いませんか!!皆様御存じと思いますが日本も間もなく裁判員制度が発足します。以前アメリカの西部劇でジョン・ウェン主役で民衆より選ばれた正義感のある人が「悪」を裁く映画を見たが全く、その通りで三人の裁判官と六人の判事で法廷で裁き「死罪」をも



決める。皆様も、もし日本国より要請があれば受けますか多分姫路裁判所と思いますが日当は一萬圓が上限です。私は天地神明に誓って余生をかけます?そして受理します。しかし、歌も舞踊もやりたいいネ: 六法全書あの「ぶ厚い事典」法律事務所等で見せて戴いて感じた事は専門用語であるが意味は解り法律は人間が秩序を乱さない様作ったものだから「常識」が解れば充分理解出来ると思います。私は過去に幸か不幸か約十年(不幸かも知れないがそれから人間が出来た様に思う先ずは急がず冷静に判断する能力)損害賠償事件で被告席で答弁それ迄映画やテレビでは見ていたが「まさか俺が被告ナンド。「どうして」と思った。そして答弁するに当って資料、書籍等殆んど無い自分自身の頭、記憶力が頼りだったが何年、何月、時間迄が集中すれば甦った。神佛の助け「天佑」かと思つた。そして原告での裁判、訴状、損害賠償事件結論的に云うなれば「無いものは取れないし、連帯保証は身内でも、してはいけない:と云う事。そして被告原告裁判費用は全て自分が現金で支払うと云う事です。(辨護士に対してそして必ず保証金を裁判所に前納です。)

話は変わりますが去る八月十一日(土曜日)午前十一時頃暑い〜夏の(気温三十七度)出来事です。私は左肩、筋二本断絶で手術している、又腰は「みの・もんだ」と同じ脊柱管狭窄症で手術をしているので橋本じゅん整形にリハビリに通院している。手前北西二百米程の場所で自転車を止められテントの中に入るとリハビリの仲間が熱心に話を聞いているではないか、「おばちゃん」と声をかけると袋にティッシュや下敷、サララップを貰つて話を夢中に聞いているので、「おばちゃん、早う行こう橋本へ」と言つたが返事が無いので仕方なく半信半疑で話を聞いていたが磁気ふとん売りの「香具師」とピョンと来たので「これイラン、帰るワ」と云うと主な物は取つて「帰れよ」と怒鳴られた!!私はその布団綿百%と見ていたので何が五十万円や何が低周波や、何が遠赤外線綿や危ない危ないと早々と帰つたが仲間の人は二十三万円を買つていた。その人は納得して心地良い布団と云われて居ますので私は何とも云えないが「あなた」なら、どうします?騙されない様にしましょうネ。ドラマを見て、可愛そうに:そして涙、面白ければワツハツハツと大声で笑う、そして

腹をたて、恐るのはアルツハイマーの始まりらしいですよ心身共に元気で生涯現役で終えたいものです。

“Health mind in a Health Body.”
(ヘルス・マインド・イン・ア・ヘルス・ボディ)「健全なる心は健全なる身体に宿る」の諺の通り身体は丈夫でなければいけません。そして「老人力」で世の為パワー全開しましょう。私の座右の銘は「人事を尽くして天命を待つ」で結果は時の運で悪くても諦めがつくでしょう。「光陰矢の如し」と云いますがVery hot. hot Summer is over! Oh Oh?



Cold Cold! Winter has Come. & Merry Xmas & A Happy New Year. 非常に暑い〜夏(地球温暖化?)が過ぎ心地よい秋はなくオーオー一気に寒い冬の到来、クリスマス、そして新年を迎えれば、新役員の選考、要請が、ありますが主役の「あなた」呉れ〜も宣敷く受理して下さい。最後になりますが、老人大学祭で展示されました園芸部の野菜、手芸部のきれいな作品、陶芸部、書道部のプロ級作品、頭の体操のI・T部、作品に贅辞を贈り私共舞踊部の一年集大成の踊り芸能発表させて戴きました。では老大的益々の発展、存続を希望します。



福崎町文化財探訪記(1)

福崎町教育委員会 出田直

はじめに

福崎町の歴史を見ていくと、1万2000年以上前の旧石器時代の石器が見つかり人の足跡が見え、それ以降も、縄文時代、弥生時代、古墳時代などそれぞれの時代について、当時の生活の様子を知ることが出来ます。それらの石器や土器などは神崎郡歴史民俗資料館で展示しており、そこに行くことによって歴史の一端に触れることが出来ます。

では、福崎の歴史に触れるためには資料館などに行かないとダメなのでしょうか。土器などはそこに行かないと見ることが出来ないかもしれませんが、それ以外でも見ることが出来るものがあります。今回は、ある日の文化財探訪記から福崎町の歴史の一端に触れてみましょう。

探訪記

○月○日 今日、朝から風もなく小春日和ののかな日です。福崎町の歴史を散策するにはちょうどいい日になりました。市川の西側の古墳時代の歴史遺産を中心に散策してみましよう。

神谷^{ことだに}の大歳神社の北側の坂道をこもれ道を浴びながら歩いていくと、きれいに整備されたお寺につきました。本堂には『医王寺』と記されています。医王寺の本堂の左を進んでいくと、階段が作られていました。そこには薬師山古墳という看板が掲げられていました。確かに、ここは薬師山という名前が知られています。福崎の歴史を記している書物を見ると、「神谷古墳」となっていました。遺跡の名前を記すとき、その字名を用いることが多く、それからいけば、薬師山古墳も正しいかもしれ



ませんが、遺跡地図などには神谷古墳とあるので、その名前で今は覚えておきたいと思います。

看板を過ぎて少しいくと土の盛り上がりの中の真ん中に石で造られた横穴が見えてきました。横穴式石室というものを持つ古墳です。この古墳は、町内では数少ない方墳の可能性を持つ物として知られています。石室内は土が入り込み立ったままでは入れませんが、かがんで両膝を抱えた状態で入ることが出来ます。石室の玄室部分はやや広い空間になっており、子どもだと立つことが出来そうなくらい

いになっています。

石室を出て、古墳を一周した後、本堂の西にある小さなお堂のすぐ南に隣接する墓石のところに行きました。墓石の下の台石には古墳から出土したと考えられる石棺の蓋石^{ふた}がありました。小さいながらも凝灰岩^{ぎょうかいがん}で造られた家形石棺の蓋石です。神谷古墳から出土したものでしょうか。

高岡地区唯一の古墳を後にして、医王寺の西の道を北に向かって長野方面に進んでいきます。四つ角を右に曲がり坂道を進んでいくと池が目に入ります。池の北側には墓地があり、その墓地の東南角に墓石のような状態で一つの石が立っています。

長野の石棺として知られている古墳時代の棺おけの蓋石です。この石棺を持っていた古墳がどこにあったのかは今ではよくわかっていませんが、神谷古墳の可能性もあります。この石棺の身の部分は、今は福田墓地にあることが知られています。この石棺の身を訪ねるべく墓地から、道を東に長野の集落の中を進んでいきます。

墓地から坂を下り古くからある集落の中を東に行くと県道田口福田線に出ます。その道を少し南に進み四つ角を左に曲がると七種川の神谷橋を越えて福田の集落に入ります。集落を進むと道の北側に『固寧倉』と記された看板を見ると、江戸時代の飢饉の際の食糧備蓄倉庫だとわかりました。

その倉を後にして東に進むと、大歳神社の大きな石造鳥居があります。その鳥居をくぐり大歳神社に向かつて進むと用水路に当たります。用水路に沿って東側に進むと福田墓地に行き着きます。福田墓地の西隣には百歳の森が整備され満100歳を迎えた方はこの森に記されます。百歳の森に石棺があるのではなく、福田墓地の元の斎場の祭壇として使われていたというので、一路水路に沿って斎場に行きました。用水路にかかっている橋を渡り、墓地に入るとその目の前には長野の墓地にあった物と同じような大きさの石がありました。

出来ませんでした。この石棺は古くから知られているもので大変貴重なものであることがわかりました。

ここから用水路に沿って東に山崎の集落に向かつて進むと、「大杉兵太郎の顕彰碑」の横に大きな家形石棺の蓋石を見つけました。この石も、古くから知られているもので、元はここではなく田の中に立っていました。かなり古くから田に立っていたと考えられ、この土地の字名が「立石」ということは知られるところですが、今まで見た、石棺の中でも大きなものでこの石棺に見合う古墳を探すと、山崎大塚古墳が思い出されます。残念ながらこの石棺と大塚古墳との関係はわかりませんが、可能性の一つとして考えられるものではないでしょうか。

この石棺とかわかりが考えられる大塚古墳を訪ねるべく、播但線の踏切を渡り、大塚古墳を目指します。大塚古墳に行くまでに、古墳の北側の用水路のところ、農耕用の橋として利用されている石棺材の一部を見ることが出来ます。

石棺材を農耕用に利用したり石仏を刻んだりすることはこのあたりでもよくあります。長野の石棺にも「萬靈佛果」という文字が刻まれています。

大塚古墳北側の用水路の石棺材はよく見ると、溝が掘り込まれ石棺の底石ということがわかりました。これも大塚古墳とかわかりが指摘されています。

このような石棺を持つ古墳の主は誰だったのでしょうか。

大塚古墳をここから眺めると、古墳の上にはお堂と共に真っ赤な鳥居が目に入ります。そこに行く



と、石が崩れて石室の中が見えます。石室の崩れている部分はちょうど奥壁と呼ばれる部分で、横穴式石室の一番奥の部分に当たります。知らない人はここが入り口と勘違いするかもしれませんが、南側に回るとそこにも穴があいていました。羨道と呼ばれる通路に当たる部分の天井部分から入ることが出来ます。本来の入り口はこのすぐ南にありますが、埋まっているために判りません。この天井石は盗掘により開けられたものと考えられます。ここから中に入ってみると神谷古墳同様に石室内に土が流れ込み、ある程度埋まっていますが、ここは、大人でも比較的楽に入ることが出来ます。玄室内は大人でも立っていることが可能なほどです。この古墳の横穴式石室の長さは12.3mにもなり、比較的大きな横穴式石室として知られています。

古墳の石室から出て墳丘の上に立ってみると周辺に小さな穴があいているのがわかりました。その穴は狐の穴ということで、この古墳を別名「狐塚」といったのもう

なづけます。しかし、この周辺には、狐塚古墳という名前の古墳が知られており、混同を避けるためにも山崎大塚古墳の名称で覚えておきたいと思います。

この古墳は、昭和47年1月12日に福崎町指定史跡になったということが設置されている説明板から知ることが出来ました。

この古墳は、町内の古墳と比較しても造られているところが、水田となっている平地部分で山ろくなどに多く造られている古墳とおもむきが少し違います。そのような古墳の被葬者を思い浮かべながら、古墳を後にしました。

ここから、北側に山崎二ノ宮神社の裏山を見ながら東にある市川に架かる月見橋へと進んでいきます。

二ノ宮神社の裏山は「神前山」といい神崎郡を開拓した神が鎮座した大岩があることで知られており、神崎郡名起源の場所と知られています。

今日の、歴史散策は夕暮れとなった時間で帰路につきました。次回も、機会があれば歴史散策を行いたいと思います。



探訪記主要箇所位置図

- 1 神谷古墳
- 2 長野の石棺
- 3 固寧倉
- 4 福田墓地の石棺
- 5 山崎立石の石棺
- 6 大塚古墳北の石棺
- 7 大塚古墳

ふるさと文化祭

福崎町文化協会副会長 秋武千賀子

福崎町文化協会主催の主な行事の一つに「ふるさと文化祭」があります。

文化協会発足の年に第一回を、そして今年（平成二十年）一月二十七日には第二十一回を開催しました。

第一回から第十二回までは「ふるさと文化祭」と称し、コーラス、大正琴、マーチングバンド、マンドリン、吹奏楽、金管バンドなどの演奏で構成されてきました。第十三回からは、「福崎町の歴史や伝承を大切にし、その上に立った新しい文化の創造に努め、町の発展に尽くす。」という文化協会の目的をもう一度しっかり考え直し、それまでの音楽祭に加え伝統芸能も取り入れていこうと、その名称を「ふるさと文化祭」と改めました。

そして、福崎町の社寺に伝統的に引き継がれている、鬼追い、浄舞、浦安の舞、鬼太鼓など、また、

和太鼓、謡曲、仕舞、箏曲、尺八、民謡、吉備舞など日本の伝統芸能の披露にも取り組んでいます。

平成十九年二月十一日には、ふるさと文化祭第二十回と町制五十年記念行事として、「短歌・書・華のコラボレーション」を行いました。

山桃忌奉讃短歌祭での通泰賞受賞作品の朗詠に合わせ、その作品を筆で書き下ろし、同時に自然の草花を生けるといいうすばらしい共演でした。

ここに、文化協会の主催・共催する二つの事業「ふるさと文化祭」と「山桃忌奉讃短歌祭」が一つとなったことを実感し、文化協会の力強い歩みを確信しました。それは、まさに成人式を迎えたような喜びでもありました。

さて、文化祭と申しましても、本来「文化」とは何を意味するのでしょうか。その答えは、「福崎町文化」第三号「福崎文化と柳田國

男」と題された越川正三先生の文の中にありました。

「文化というのは、人間が自分たちの暮らしを楽しくし、便利よくするために工夫したり作ったりしたもののすべてを指す。だから人間が手を加えたものはすべて文化なのである。」と。

また、その文の中に柳田國男先生の講演の一部が引用されています。「文化は楽しいものであるべきだ。その楽しさを高めていくことが文化の向上なのだ。そして、この楽しみは、多数の人が一緒になって喜び合うことを意味する。」

この柳田國男先生のお話に、ふるさと文化祭をあてはめてみます。それぞれの演奏、それは演じている人も、聴いている人もお互い楽しんでいきます。

演奏は歳月を重ねるごとに目に見えて輝きを増しています。また、出演者も、保育園児、幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生、一般の方とすべての年齢層にわたり、多数の人が一緒になって楽しんでいきます。

まさに、お話されているとおりに

なっています。

このように、音楽・芸能を通して、柳田國男先生の文化についての講演のようにみんなが楽しく交流ができていくことは、本当にうれしいことです。

二十一年の歳月をかけて、ふるさと文化祭はしっかりと福崎町に根をおろし、枝葉を広げています。

これからも、福崎町の豊かな自然と歴史、そして、人々のぬくもりの中で、ますます「ふるさと文化祭」が発展していくことを願っています。



公民館クラブの紹介

「いなみ野神崎」グループ

代表 内藤 正登
 芸能担当 松岡 宏信

私たち「いなみ野神崎」グループは、昨年十月に福岡市公民館クラブに登録し、文化センターでおこなわれました秋祭り芸能発表会が初舞台で、傘踊りとハーモニカ演奏に出演させて頂きました。私たちのグループの活動状況について少し紹介させていただきます。

平成十四年にボランティアグループ「いなみ野神崎」として神崎郡三町（福岡・市川・神河）に在住する、県立いなみ野学園地域活動指導者養成講座の卒業生と現役学生により結成しました。目的は、地域における健康活動や福祉活動、社会参加活動を通して、地域の暮らしの向上に貢献することです。現在会員数は三十六名で、活動範囲は郡内が中心です。

具体的な活動としては、
 ※文化活動として、南京玉すだれ・傘踊り・皿回し・ハーモニカ・マジック等慰問活動や地域のイベントに参加

※健康福祉活動は、郡内親睦グラウンドゴルフ大会及びシニアニュースポーツの普及活動・養護施設の車椅子点検

※環境美化運動は、公共施設・公園等の美化清掃です。
 活動内容も多種多様にわたり、年々



活動量も増加しており要望に出来るだけ応えられるよう、活動内容に応じてそれぞれ分担して対応しています。ただ、芸能関係の練習の機会が少なく、時間・場所の確保に苦慮しています。

絵手紙に心ときめき、癒されて

三輪 吉正

「人生僅か五十年」と言ったのは、一世紀前のこと、21世紀に入り「人生八十年代の寿命、長寿社会」の今日である。私が絵手紙を始めたのは、今から十年前のことである。職域を退職して、故あって、八千種郵便局に頼りないガードマンとしてお世話になっていた時、当時は郵政省発行の、郵便番号簿に絵手紙の挿絵が掲載されていたのである。この事が契機となり、八千種郵便局、局長が絵手紙教室を立ち上げられたのである。最初のクラブ員は、三十数名の女性達ばかりの、サークルであった、私が入会したのは、絵手紙クラブとして発足一年後の時である。文字通り「六十の手習」として、女性ばかりのクラブに、気もそぞろに、蛮



勇をふるって入部してからはや十年の才月が流れて往きました。講師の美藤先生から、「三輪さん、ぼちぼちやりましようや」と声を掛けられ、やっと居心地がついたのを鮮明に覚えています。二十一世紀の今日情報の多様化とマスメディア、報道機関、IT等の著しい発展と進歩、スピードアップの慌しい世相の中にあつて、先取り情報の把握に躍起となつている社会形態には、へきへき、するばかりである。それに反して手紙、葉書、絵手紙のように、紙面を手書きの文章で手にした時の喜びは、また、格別な味わいがある。ことに絵手紙で、四季おりおりの便りが届いた時、思わず心がときめき、何故かほのぼのと癒される心地がする。たとえその絵が上手であろうと、下手であろうと思わず笑みがこぼれてしまう。

「たかが絵手紙、されど絵手紙」である。私が入院された知人に狸の絵手紙を出したところ、退院後あの絵を見て、元気を、もらったんやと言われた時は、本当に私も嬉しくなつたものである。たつた一枚の葉書きの裏に描いた絵が、人様の心を暖かくするとは思ひもかけぬ事であった。これからも一途に学習に励み、心をこめて筆をとり、一人でも多くの人に、送り続けたい。ほんの一瞬だけのときめきを届けたいと思う。それが私にできる出来る人々への感謝の奉仕である。

箏曲クラブ 井奥 昭子

「三味線を弾いてみたいけどなんか難しそう・・・お琴って敷居が高いイメージだわ」なんて思われがちですが、楽器が初めての方でもわかりやすい手ほどきで、目に見えて上達します。仲間達の交流や合奏などもあります。繊細な絹糸の音色・絃の響き余韻を楽しんでみませんか。楽器がなくても始められますのでまずは気軽にお問い合わせ下さい。体験レッスンも受け付けております。



毎金曜日
 午後五時より
 生田流 井奥
 文化センターにて
 TEL 二二一六七四〇

都山流尺八クラブ

古くから日本に伝わる楽器、尺八の魅力、それは竹の響きが創り出す音色。悲喜の感情を一本の尺八で豊かに表現する事ができる楽器でもあります。優雅な古典の音楽に触れて心豊かなひとときを過ごす機会を皆さんも一度体験してみませんか。

毎週月曜日 午後四時
 マンツーマンによる指導です。
 連絡先 TEL 二二一三九〇〇
 古田まで
 女性の方も大歓迎。(体験用尺八)持

「ち帰り可」もあります。」

福崎町短歌会の活動について

代表 山下清市

昭和31年5月合併、新しい福崎町が発足、広報ふくさきは昭和34年発刊。短歌作品が広報に掲載されたのは昭和57年広報200号から始まりそして、現在480号まで掲載されました。

短歌会の概要

指導者は岩朝加都良先生

- ① 毎月第二土曜日勉強会（午後）
- ② 山桃忌奉賛詠短歌会の賛助
- ③ 年二回の発表会 文化祭にて展示
- ④ 広報ふくさきに作品掲載

福崎町は、文化の先進の町で井上通泰、柳田國男先生の二人が代名詞です。戦後はいち早く、木村真康氏・西賢治氏の先達によって福崎町短歌会は礎が出来ました。現在の会員は14名です。和歌短歌といえはだれしも、近より難しく思われますが、小鳥でも春になれば食むだけでなく、花に轉り、生きる喜びも悲しみも感じている筈です。五七五七七の31文字に日頃の想を感じるままに、歌にしては如何ですか。短歌会では会員を募っております。今後共町民の「短歌会」にご支援をお願いします。



第二十六回 町展作品募集

第二十六回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

◆ 会期 五月十六日（金）～五月十八日（日）

◆ 会場 エルデホール

◆ 部門 日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る

◆ 作品搬入

五月十日（土） 午前九時～午後四時

◆ 審査員

日本画	青田 賢蔵
洋画	門脇 正弘
書	井上 映粧
写真	北村 泰生
彫塑・工芸	牛尾 啓三



山桃忌奉賛 第二十三回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を忍ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家顕彰会により山桃忌が行われています。

短歌会は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌当日行っています。本年の短歌会は、左記の要領で作品募集の予定です。

記

日時 平成二十年八月上旬

場所 柳田國男・松岡家顕彰会 記念館二階

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内

応募料 一首につき五百円

現金または小為替

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内

締切 平成二十年六月十日

賞 通泰賞・町長賞・議長賞・教育委員会賞・顕彰会賞・文化協会賞・商工会賞・JA兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作数点

選者 川口 汐子 先生

（をだまき同人）

* 表紙の写真 *

福崎町を通る「銀の馬車道」と辻川界隈の大庄屋「三木家」です。銀の馬車道は、明治の初め、日本有数の银山として栄えた生野鉱山と飾磨港の間、約49kmを結ぶ道として新しく作られ、正式には「生野鉱山寮馬車道」と呼ばれた、当時の高速道路といふべき馬車専用道路です。完成から約130年がたつた今では、道の大部分は車が走る国道や県道に変わり、一部は新幹線姫路駅になっていきます。しかしながら、「銀の馬車道」のルートをたどれば、あちらこちらに記念碑などがあり、往時のおもかげを残しています。豊かな暮らしを夢み、ファイトを燃やした昔の人たちの気持ちになって、「銀の馬車道」をたどってみませんか！

編集後記

たくさんの方々のご協力により、第二十四号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には、大変お忙しい中を、快く執筆、ご協力くださいまして、本当にありがとうございます。皆様方に、心からお礼申し上げます。